

令和4年9月5日

京口門だより No. 107

暦の上では立秋もすぎ処暑もすぎても、なかなか暑さが収まりそうでもありません。ただ朝夕はすこし涼しさを感じますし、蝉もツクツクボウシの音が聞こえてきます。新型コロナ感染症もやや減少傾向にありますが、身近に感染した人の情報がよく入ってくるようになりました。先月このたよりで述べましたように漢方薬をうまく使って早めに対処していただければと思います。

夏が過ぎると疲れや胃腸の弱りに悩む方も多くなります。また季節のかわりにアレルギーの症状が出やすくなってきます。先日も夏の疲れかひどい下痢に罹った方がいました。食べ物による中毒でもなく原因ははっきりせず、ウィルスによる感染性下痢という診断になりました。恐らくノロウィルスやロタウィルスなどによる下痢と考えられます。発熱や腹痛や嘔吐もなくただ水様性下痢が十数回もあったようです。こうしたウィルス性下痢には漢方薬の五苓散を含んだ薬が有効で早く治まってきます。その人は口の渇きもなく五苓散ではなく別の半夏瀉心湯がよく効きました。

下利にも色々な病状があり、同じ感染性の下痢で劇しい腹痛を伴い、シブリ腹となる下痢には黄芩湯という薬が素晴らしくよくききます。あるいは普段から胃腸が弱く、ちょっとした食べ物によってすぐに下利しやすい人には参苓白朮散といった薬もあります。また体が弱ったり、冷えによる下痢であり腹痛などのない場合には、真武湯や人参湯が使われます。さらに体が弱って不消化便のような下痢になる場合は四逆湯などが使われます。一方、腸に特殊な炎症性の病変ができて、下痢、粘液便、下血といった症状が起こる場合には、桃花湯などの薬も使われます。過敏性腸症候群、潰瘍性大腸炎やクローン病といった下痢をとめない、さまざまな症状を起こす病気には、その人その人によって工夫をしながら治療してゆきます。

現代医学はレントゲンやCT、MRI、内視鏡などの検査により詳しく調べて診断を下しますが、一般には下痢といえは一律に止瀉剤や抗生物質を出して治療をします。漢方のように個々の症状に応じて細やかに治療することはありません。診断も大切ですが、上手く治療できなければ病める人には有益とはなりません。

